明海大学不動産学部

不動産の不思議

学生たちの視点と発見

第286回

コミュニティ道路

超高齢社会の安全を再検討

尾形 珠緒
不動産学部1年

【学生の目】

4月に不動産学部に入学して1カ月が過ぎた。不動産の基礎を学び始めたばかりで、専門知識はまだ少ないが、街で見る不動産を誰かに説明することを意識しながら観察することで、不動産の興味や嗜好を深めたいと考えている。

地下鉄東西線の「浦安」駅近くで目にした蛇行する道路に興味を持った（写真）。蛇行の目的は速度の抑制と考えて調べると、急増する事故対策のロードピアモデル事業で浦安市が造ったコミュニティ道路だった（森田愛理「不動産の不思議第25回」14年3月18日号）。

道路をわざわざ蛇行させて車を遅くし、安全で住みやすい街を造る工夫はすばらしいと思い、更に調べた。コミュニティ道路は1972年のオランダが起源で、ボンエルフともいう。生活道路に車が入るのを防ごうと、住民が花壇や敷石を置いたことに始まる。写真の地区は35㍍程度の長さの街区が幅員9㍍程度の直線道路に沿って続く。普通の道路だと渋滞の抜け道となり、多くの車が高速で通過する可能性が高いが、ボンエルフがこれを防いでいる。

ボンエルフには蛇行させるスラローム、不規則な曲がりのクランク、部分的に狭くする狭さく、路面を盛り上げるハンプ、塗装の工夫で錯視させる方法がある。ここでは蛇行、狭さくと錯視を併用している。

車が歩行者をはねる事故が続く。高齢者が関係する事故が多く、超高齢社会では今までとは違う安全対策が必要だ。歩車分離の緩衝帯が必要との報道を見て、コミュニティ道路の安全を再検討した。

第1は、十分に操作できない運転者が進入しないよう、入り口部分の狭さくを徹底する。第2は、車が歩道に入らないようにする。ガードレールが有効だが、白くて太いガードレールは美しいとはいえない。変形や錆で醜いし、歩車共存をめざすコミュニティ道路とガードレールは矛盾する。写真では鋳物のポールのほか並木や花壇で歩車分離し、十分な配慮があるが、ポールを増やすことが考えられる。鋳物は錆の心配がなく、植栽の中に隠すように追加すれば美観も保てる。

歩道は赤茶色のレンガを敷き詰め、花や木が一定間隔で連続して均整があり、〝一つの風景〟として路面は総じて素敵だ。しかし、せっかくの美観を電柱や電線が邪魔している。電線を地中化し上空も整備できれば、運転者の気持ちも引き締まり、より安全に運転しそうだ。

オランダが起源となるボンエルフ

【教員のコメント】

人と車がしなやかに共存するボンエルフは車を制約する一方、人は適宜の利用ができる。歩道と車道の段差はなく、買い物客にも便宜として商業地にも普及したが、暴走する車には無力だ。超高齢社会の安全と快適を示す若い感性が新鮮である。